

となっており、現在のように能舞台と観客席とが屋根の下に収まった「能楽堂」になったのは明治14年に建設されたものが最初である。

西本願寺には、天正9年(1581)の墨書があり、現存最古といわれる能舞台「北能舞台(国宝)」や「南能舞台(重文)」があり、毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖ごうたんえ降誕会」では、この南能舞台で祝賀が演じられ、多くの参拝者に披露されている。

他にも京都の寺社等には能舞台を持つところが多くあり、今なお能や狂言が演じられる舞台として、活躍している。



図2-53 京都薪能(平安神宮)



写真2-84 市民狂言会(第214回市民狂言会より)

また、京都薪能たきぎのうは、毎年6月の夜、平安神宮で行われており、平成21年度で60回を数える初夏の風物詩となっている。夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。

能や狂言、謡の舞台は、能楽堂などの歴史的

な建造物だけではない。京都の旧市街地に残る京町家の前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえる。また、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

## (7) 歌舞伎

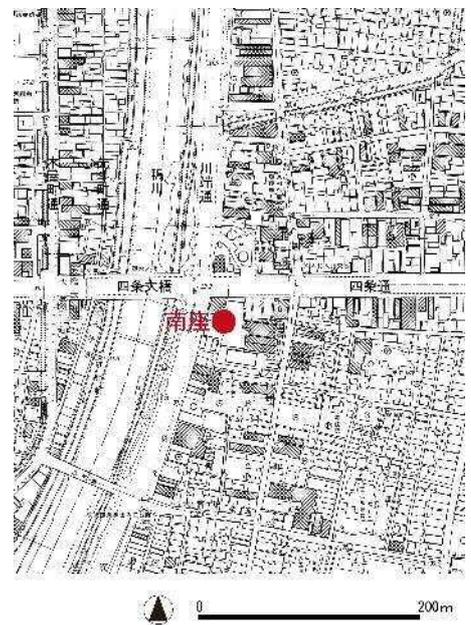


図2-54 吉例顔見世興行(南座)

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上がると、京都では日々のご近所同士の挨拶の中に、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから京都の師走を彩る風物詩であり、寛政11年(1799)に発行された「都林泉みやこりんせん名勝図会みやうしょうずえ」には既にその様子が描かれている。

歌舞伎は、今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりであると言われている。

南座は元和年間に京都所司代が公許した七つの芝居小屋の一つであったが、明治の時代まで存続したのは、南座・北座の二つのみであった。このうち北座は明治26年に廃絶し、南座